様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３３４４

研究課題名（和文）近世近代移行期の日本における儒学・洋学受容と対外認識の形成―平戸藩を中心に―

研究課題名（英文）The reception of Confucianism and Western studies, and foreign recognition from early modern to modern Japan: an analysis of the Hirado clan

研究代表者
吉村　雅美（YOSHIMURA, Masami）

日本女子大学・文学部・准教授

研究者番号：７０７２６８３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：近世後期から近代初期の儒学・洋学受容と対外認識について平戸藩を中心に考察し、次の三点を明らかにした。
（１）近世後期、藩校維新館や私塾の弘道館において、儒学の学習方法である会読・討論が藩政や対外政策の議論に活用された。（２）近世後期、松浦家江戸屋敷において奥向女性や幕臣・学者等が参加する文化交流が展開し、対外関係や洋学に関する知識が交換された。藩主松浦静山はこれらの人脈から得た海外情報を幕府に提供した。（３）明治初期、最後の藩主松浦詮は洋学導入を試みたが、旧藩士には儒学の影響が強く、菅沼貞風らの対外進出論へ影響を与えた。以上から、学問受容のあり方が藩や幕府の対外認識に影響を与えたことを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近世日本における学問受容について、先行研究では儒学・洋学の内容に注目されていたが、本研究では書物や知識が交換された「場」と人的ネットワークから考察した。狭義の学問にとどまらず、芸能や文化も含めて考察することで、ジェンダーの問題も意識して学問受容の背景を明らかにした。また、本研究では近世・近代移行期の対外認識について考察したが、特に学問・教育・文化が与えた影響を重視しており、近現代における多文化共生・国際理解の問題を考える上で、有効な論点を提示している。
さらに、地域の方々と協働して地域史料の保存・調査を行い、地域史と藩研究・対外関係史研究をつなぐ研究を進める基盤を整えることができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the acceptance of Confucian and Western studies and foreign recognition from the early modern period to the modern period, focusing on the Hirado clan, and clarifies the following three points.
(1) Confucian learning methods were used to discuss clan politics and foreign policy in the Ishinkan and Kodokan. (2) In the early modern period, the Edo residence of the Matsura family hosted cultural exchanges between women, shogunate vassals and scholars, where knowledge of foreign relations and Western studies was shared. Matsura Seizan provided the shogunate with foreign information obtained through these contacts. (3) In the early Meiji period, the last lord of the domain attempted to introduce Western studies, but the strong influence of Confucianism among the former domain officials influenced the theories of foreign expansion of Suganuma Teifu and other scholars.
As above, the way in which Confucian and Western studies were accepted influenced foreign recognition.

研究分野：日本近世史

キーワード：対外関係　藩政　儒学　洋学　対外認識　平戸　松浦家　近世近代移行期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）近世近代移行期の学問と対外認識

本研究は、近世近代移行期の日本における対外認識の形成過程を、儒学・洋学が与えた影響という観点から考察したものである。

近世後期の対外認識については、江戸幕府の政策担当者に関する研究、地理書・洋書の著述・翻訳に携わった知識人に関する研究、外国から入る情報に関する研究などが進められてきた（荒野泰典「近世の対外観」『岩波講座日本通史　第 13 巻』岩波書店、1994 年、松方冬子『オランダ風説書と近世日本』東京大学出版会、2007 年）。このように、書物・情報の内容に注目した研究が進められている一方で、その内容を書物や情報が交換された「場」や人的ネットワークと関連付けて検討した研究は少なく、検討の余地が残されている。近年、昌平坂学問所や藩校・私塾を対象に、知識人の読書や会読・討論に関する研究が進められている（前田勉『江戸の読書会』平凡社、2012 年）。このような学問状況のもと、近世後期の対外認識がどのように形成され、近代の対外認識にいかなる影響を与えたのか、明らかにする必要がある。

（2）平戸藩からみる学問と対外認識

主な研究対象として、平戸藩を設定する。平戸藩は近世初頭の異国船の入港地であり、オランダ商館が長崎に移転した後も、領内の海岸警備や長崎警備を行うなど、近世を通して対外関係への対応を迫られた藩である。また、9 代藩主松浦清（静山のこと、以下、松浦静山とする）は洋書・和書・漢籍を収集した大名であり、儒学・洋学双方の影響について考察することが可能な藩でもある。

近世後期の平戸藩の学問に関する先行研究においては、松浦静山の収集した洋書の書誌学的な検討が行われている（松田清『洋学の書誌的研究』臨川書店、1998 年）。しかし、静山の学問受容を可能にした環境については、幕府知識人との交流に関する研究（瀬戸口龍一「『甲子夜話』にみる松平定信文人サロンの動向」『専修史学』33 号、2002 年）を除くと、十分に検討されていない。静山個人にとどまらず、人的ネットワークという観点から、平戸藩内における学問受容について考察する必要がある。

また、明治期には菅沼貞風などの平戸の旧藩士層が対外進出論を唱えたが、この議論が近世後期以来の藩主・藩士の学問受容とどのように関わっているのか、明らかにされていない。

研究代表者は、これまでに近世中期の平戸藩の対外認識・地域意識に関する研究を行っており（吉村雅美『近世日本の対外関係と地域意識』清文堂出版、2012 年）、菅沼貞風に関する研究にも着手している（吉村雅美「菅沼貞風の「鎖国」認識再考」『史艸』58 号、2017 年）。そこで、本研究により、近世後期段階の対外認識について学問との関わりから考察した上で、近代日本に与えた影響を展望することとした。

２．研究の目的

上記の問題意識に基づき、本研究では平戸藩を対象に下記 3 点を解明することを目的とした。

（1）藩主・藩士による儒学・洋学受容の方法

近世後期の平戸藩の学問受容については、「蘭癖大名」と称される松浦静山の動向に注目されがちであるが、藩士や静山以降の藩主も視野に入れて、どのような方法で学問を受容したのか検討する。その際、藩校の維新館にとどまらず、平戸藩士を含む諸藩の藩士が遊学していた京都の私塾維新館にも注目することにより、18 世紀末から 19 世紀初頭の大名家が抱えていた課題に対して、学問がどのような役割を果たしたのか、明らかにする。

（2）江戸における交際と学問受容の関係

近世後期の平戸藩の学問についての先行研究および上記(1)は、松浦静山を含む男性知識人を対象としたものである。本研究では、江戸屋敷における学問受容について、狭義の儒学・洋学に限らずに芸能・文化に対象を広げて検討することで、奥向女性を含む様々な身分・属性の人々を含めて考察する。さらに、それらの人的ネットワークが平戸藩（江戸・国許）における学問受容にどのような影響を与えたのか、解明する。

（3）近世近代移行期における学問と対外認識の関係

研究代表者は、菅沼貞風を中心に近代初期の旧平戸藩士層の学問受容のあり方を明らかにしいる（前掲「菅沼貞風の「鎖国」認識再考」）。貞風は『大日本商業史』（1892 年）の著者であり、近代の対外関係史研究の基礎となる史料を収集した学者として知られている。したがって、平戸藩の視点から、近世と近代の対外関係史研究を架橋する論点を提示することが可能である。

本研究では、最後の藩主松浦詮とその子弟が同時期にどのように洋学・儒学に接していたのか解明する。そのうえで、これまでの研究成果を踏まえて、藩主松浦家の学問と旧藩士層の学問受容がどのように関わり合っていたのか考察する。

以上のように、本研究は平戸藩・松浦家を対象としているが、他藩と共通する課題や、平戸藩から幕府への情報提供についても検討することで、近世後期から近代の大名家における学問が日本の対外認識にいかなる影響を与えたのか、明らかにすることをめざした。

３．研究の方法

（1）平戸藩主・藩士による儒学・洋学受容

松浦史料博物館所蔵史料の調査を行い、藩校の維新館および儒者皆川淇園に関係する史料を収集した（「維新館七箇条問答」など）。そして、静山とその家臣によって、儒学がどのような方法で学ばれており、藩政や対外関係に関する課題とどのように関わっていたのか検討した。

さらに、松浦静山による洋学の受容について考察するために、静山が収集した洋書の一部（同館蔵の蘭書・英書）について、タイトル・内容の一部を翻訳するとともに、書物目録である「新増書目」（同館蔵）に掲載されている書物について、データ化を進めた。

（2）江戸における松浦家の交際と学問受容

松浦史料博物館所蔵史料のうち、松浦静山の側室蓮乗院に関する日記類である「蓮乗院日記類」から、松浦家構成員の平戸藩江戸屋敷における交際に関する記事を抽出し、交際のなかで学問・知識・情報がどのように交換されていたのか分析した。

さらに、このような交際関係のなかで松浦家が採り入れた知識や海外情報が、幕府にどのように提供されたのか、松浦静山と林述斎を中心に考察した。

（3）近世近代移行期における学問と対外認識

長崎歴史文化博物館において、楠本文庫の調査を行い、儒者楠本端山に関する史料を調査・撮影した。端山は最後の平戸藩主松浦詮の侍講をつとめたほか、明治期に旧平戸藩士のための教育機関を設立した儒者である。松浦詮が端山に宛てた書翰から、近世近代移行期の平戸藩において、儒学・洋学がどのように学ばれていたのか検討し、幕末期から明治初期の平戸における対外認識・対外進出論にいかなる影響を与えたのか考察した。

４．研究成果

（1）平戸藩主・藩士による儒学・洋学の受容について

平戸藩校維新館や皆川淇園の私塾弘道館において行われていた議論と、藩政や対外政策との関わりを明らかにした。維新館については、藩主松浦静山から教員に対して学問の心得を尋ねる下問があり、討論のうえで一致した回答を提出するよう求められていた。平戸藩士を含む諸藩の藩士が入塾した弘道館においても、『礼記』の「合語」をモデルとした問答形式の授業が行われ、18 世紀末から 19 世紀初頭の日本において課題となっていた異国船対応や流民への対応について、議論が交わされていた。このように、現状の課題解決のために、儒学の学習方法が用いられていたことを明らかにした。以上の成果を吉村雅美「近世後期の藩校・私塾における学問と政治議論―維新館と弘道館を中心に―」（『考古学ジャーナル』752 号、2021 年）として発表した。

また、藩主松浦静山の学問受容の特徴を明らかにするために、「新増書目」に掲載された書物の著者・書名等をデータ化し、これをもとに下記（2）の分析を進めた。

（2）江戸における松浦家の交際と学問受容について

①江戸屋敷における交流

「蓮乗院日記類」のほか、「江都感恩斎詩草」や「亀岡随筆」（松浦史料博物館所蔵）など、松浦家構成員が携わった文化や芸能に関する史料を収集することができた。これらをもとに、松浦家江戸屋敷において、奥向女性（蓮乗院・女中ら）や学者・幕臣（林述斎・近藤重蔵・屋代弘賢ら）が参加する詩歌・奏楽の会を含む学問・文化交流が行われていたこと、松浦家子女の診察・見舞いなどの形で医者（杉田玄白・桂川甫周）、宗教者（修験の行智ら）との日常的な交際も展開していたことを解明した。このうち、奏楽による交流については、吉村雅美「近世後期の大名家奥向における奏楽の変容―松浦静山と松浦熙の比較から」（北原かな子・浪川健治編『近代移行期における地域形成と音楽』ミネルヴァ書房、2020 年）として発表した。

②松浦静山の書物理解と幕府への知識提供

静山が収集した洋書（蘭書と英書、松浦史料博物館所蔵）のタイトル・内容と「新増書目」に掲載された解題を比較し、静山の西洋理解の特徴について考察した。その結果、静山が西洋の政治・社会を理解する上で、上記①の学問・文化交流による人脈が生かされるとともに、Republijk（共和国）が「会読」と翻訳されるなど、儒学の知識・概念も影響を与えていたことを明らかにした。

さらに、上記①の交流を通して得た対外関係に関する知識・情報を、静山が幕府儒者の林述斎に提供していたことを指摘した。情報提供の例として「平戸考」（松浦史料博物館所蔵）を挙げ、普陀山に関する考証について考察した。そして、静山が洋書や地理書による知識に限らず、修験から得た情報を提供しており、幕末期から近代初期の対外進出論につながる論点が提示されたことを明らかにした。

③藩士の書物受容

松浦家が収集した書物に藩士がどのようにアクセスしていたのか、松浦家の文庫の管理に関する史料（松浦史料博物館所蔵「勤務録」）から検討した。その結果、貸出手続きを経て藩士が書物を利用することは可能であったが、松浦家による書物利用が優先されていたことを明らかにし、明治期にこの文庫が「秘庫」として認識されるに至ったことを指摘した。

以上の①から③の成果を、吉村雅美「学問の場でつくられた対外認識」（村和明・吉村雅美編著『伝統と改革の時代』吉川弘文館、2023 年）として発表した。

（3）近世近代移行期における学問と対外認識

楠本端山宛の松浦詮書翰を分析し、明治初期、詮が東京において「開化」の状況を批判的に捉えながらも、洋学の必要性を認識し、自らの子息や旧藩士子弟の教育に採り入れようとしていたことを明らかにした。一方で、国許にとどまった旧藩士子弟には洋学が普及せず、依然として儒学が強い影響を与えていたことを指摘した。そして、このような状況が平戸出身の菅沼貞風らの対外進出論へ影響を与えたという見通しを示した。以上の成果を、吉村雅美「松浦詮のみた洋学と「開化」」（『長崎歴史博物館研究紀要』14 号、2020 年）として公表した。

（4）平戸町人に関する文書の調査

上記（1）～（3）に加えて、平戸市内の個人宅において、平戸の有力町人の文書である谷村家文書（個人蔵）の調査を行った。研究開始当初は、2020 年度・2021 年度にオランダ国立図書館（Koninklijke Bibliotheek: KB）において 18 世紀末から 19 世紀前半に刊行されていた欧文書籍・雑誌の調査を行い、松浦静山が収集した洋書と比較する予定であったが、新型コロナウイルスの感染流行により、断念せざるを得なかった。しかし、下記のように、谷村家文書について複数回の調査が必要となったため、研究協力者とともに、国内において史料調査を行うこととした。

平戸藩の町人の文書を使用した研究は少なく、藩政文書と地域史料を結びつけた研究を行う余地が残されている。谷村家文書については、谷村友三が著した捕鯨書「西海鯨鯢記」が紹介されるなど（平戸市教育委員会編・発行『平戸市の文化財 13　西海鯨鯢記』1980 年）、捕鯨に関する知識を有していた家として知られているが、文書の全体像は把握されていない。そのため、近世・近代の谷村家が平戸藩および平戸町にどのように位置づけられるのか、明らかにされていない。

そこで本研究では、未整理であった谷村家文書の整理および目録作成を行った。①2019 年 8 月 20 日～21 日、②2022 年 6 月 11 日～12 日、③2023 年 3 月 4 日～5 日、④2023 年 11 月 10 日～11 日に、平戸市内（個人宅）において谷村家文書の整理・調査を行った。このうち、①～③について、高槻泰郎氏・酒井一輔氏・上野大輔氏・須田清香氏の協力を得た。

2024 年 3 月までに、近世・近代文書 1180 点について、史料の封筒詰め作業を完了した。また、433 点の史料について、仮目録を作成することができたが、今後も目録作成を継続する必要がある。

調査の過程で、文書群のなかには捕鯨書・天文書のほか、平戸藩主から谷村家当主に当てた直書、芸能に関する史料、異国船への対応に関する史料も含まれており、有力町人と藩との関係や、町人と学問・文化・産業との関わりを考察する上で重要な史料群であることが明らかになった。今後、谷村家文書を用いて、武士と町人の双方の視点から、近世後期から近代における学問受容および対外認識について考察する基盤を整えることができた。

(5)本研究の特徴と成果

本研究の特徴は、①国許と江戸・京都の学問状況を考察したことで、藩を越えた学問の影響力を提示したこと、②古文書とオランダ語の洋書を併せて検討し、洋学と儒学を結び付けて考察したこと、③近世から近代の対外認識を通時的に捉える論点を提示したこと、④地域史料を用いた研究の基盤を整えたことである。

以上のように、本研究では平戸藩を中心に考察したが、他藩や幕府に関係する論点も提示し、近世における大名家の学問受容の具体像と、それが近世後期から近代初期の対外認識形成に与えた影響を明らかにすることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉村雅美	４．巻 752
２．論文標題 近世後期の藩校・私塾における学問と政治議論―維新館と弘道館を中心に―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉村雅美	４．巻 129-5
２．論文標題 七 対外関係（近世、日本、二〇一九年の歴史学界―回顧と展望―）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 117-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉村雅美	４．巻 14
２．論文標題 松浦詮のみた洋学と「開化」－楠本端山宛書翰から－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 長崎歴史博物館研究紀要	６．最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉村雅美	４．巻 834
２．論文標題 近世日本に関わる在外史料研究の現在	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史評論	６．最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 吉村雅美
２．発表標題 近世中後期における対外認識と「国家」意識―平戸藩を中心に―
３．学会等名 九州史学研究会大会（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 吉村雅美
２．発表標題 平戸藩松浦家における「会読」「集会」と洋書理解
３．学会等名 「公議」研究会例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 吉村雅美
２．発表標題 貿易の記憶と記録―平戸から見た長崎・五島―
３．学会等名 シンポジウム「『長崎口』の形成―15～19世紀の長崎から見た日本列島の国家形成と対外関係」（鹿島学術振興財団研究助成　2019年度）（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 村和明・小倉宗・佐藤大介・彭浩・酒井雅代・高槻泰郎・小関悠一郎・吉村雅美・春木晶子	４．発行年 2023年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 208
３．書名 日本近世史を見通す２　伝統と改革の時代	

１．著者名 上野大輔・清水光明・三ツ松誠・吉村雅美・小田真裕・谷徹也・三宅正浩・小倉宗・小関悠一郎・山本英貴・村和明・酒井雅代・木土博成・牧原成征・多和田雅保・小松賢司・高槻泰郎・佐藤雄介・伊藤昭弘・後藤敦史・彭浩	４．発行年 2024年
２．出版社 勉誠社	５．総ページ数 411
３．書名 日本近世史入門―ようこそ研究の世界へ！	

１．著者名 北原かな子・浪川健治・根本みなみ・吉村雅美・古家新平・藤原義天恩・山下須美礼・鈴木啓孝	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 305
３．書名 近代移行期における地域形成と音楽	

〔産業財産権〕

〔その他〕

JWUシーズ「近世日本における対外認識の形成と学問」
https://www3.jwu.ac.jp/research/research-database/seeds_pdf/PDF2_bunn/2-3_yoshimura.pdf

長崎口の形成
https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/nagasakikuchi.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	高槻　泰郎 (TAKATSUKI Yasuo)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	酒井　一輔 (SAKAI Kazuho)		
研究協力者	上野　大輔 (UENO Daisuke)		
研究協力者	須田　清香 (SUDA Sayaka)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関